

## 目 次

事務局長から見た附属図書館 野角計宏前事務局長インタビュー .....	1
「電子図書館」の前書きと索引について ( Frank Bennett ) .....	4
平成12年度図書館統計 .....	6

No.140

2001. 8. 15

## 事務局長から見た附属図書館 野角計宏前事務局長インタビュー

- まず、名古屋大学の中央図書館について印象はいかがでしょうか。

**野角事務局長**（以下敬称略）図書館へ行ったことは幾度かありますけれど図書の利用はないです。だから正直言ってあまりわかりませんが、時々、ペーパーで館長や部長から整備やサービスの状況についてお話を伺っています。

印象というと、行政面での印象でしかないのですが、そういう面では名古屋大学は充実に向けて努力されていると思います。大きな大学、比較的伝統のある大学ですから、そういう点での改善すべき点が残っているとは思いますが。図書館利用者としての印象ではなくて申し訳ないですけど。

- 附属図書館のホームページをご覧になったことは。

**野角** スミからスミまでは見ていません。私は親しみ易いトップページがいいなと思います。ホームページのあり方は、1年ほど前から気になっていたものですから、事務連絡協議会全体で取り組もうということで、アンケートを実施しまして、その回答を先日の事務連絡協議会で報告しました。主として大学全体のページを中心に予算を何とか確保しながらとにかく改善をしたいと思っています。その辺から、学生さん、あるいはこれから学生になろうと思っている人、あるいは住民、そういう人とのつながりがつきやすくなると思います。

- 図書館のサービスについては、どうお考えになりますか。

**野角** 私の経験からして、名古屋大学附属図書館は飛びぬけてとは言いませんが、標準以上のサービスでいろんな課題に対応していると思います。住民への開放や、時間の延長などどちらかというところをよくやっているほうだと私は思います。

- 大学の中での附属図書館の存在価値は何であり、存在価値があるとしたら、図書館がそのために果たすべきことは何でしょうか。

**野角** 後半は少し難しい質問ですね。学生が学習するにしろ、研究者が研究するにしろ、やはり創造性、新しいことを生み出していくためには、あるいはそういうものを身に付けるためには図書館というのは非常に重要です。世界の中で日本がこれから果たしていかなくてはならないのは、単に情報を学ぶだけではなく、情報を創り出していくこと。その訓練の場でもあり、産み出す生産の場でもある。またそうあらなければならないと何かにも書きました。

少し話が飛躍しますが、私は初等中等教育畑が割りときが長かったのですけれども、その中で学校図書館というものを担当してきたことがありました。その時分に例えばアメリカに学校視察に行きますと図書館の位置付けが違うのです。図書館が学校の中心にある。正確な用語かどうか

かわかりませんがリソースセンターと呼ばれていて、要するに勉強する材料のセンターです。学習という観点からいうと、主体が児童、生徒にあり、そこで創造性というか、積極的に自ら必要な情報を選んで考え、情報を産み出す場になっているのですよね。

日本は基本的に教育というのは、与えられる情報をそのまま身につけるといふか、そういう教育が行われてきたわけですね。新しい価値をこれから見出さないと日本はやっていけないという意味でも、先進国として世界をリードしていくためにも、創造性というのが非常に重要です。そういう意味では大学図書館も、私は共通する部分があると思うのです。単に勉強するところ、本があるところというだけではなくて、いろんな情報をいろんな形で学生が主体的に集めて活用し、そこで何か新しい発想を得ることも重要だと思うのです。

- パソコンも手作りなさと伺いました。電子図書館についてはどのようにお考えですか。

**野角** 電子図書館化ということもこれから進めなくてはならないことは確かですが、その中でやはり文字情報の重要性があると思うのです。これから改善され進歩していくかもしれないけれど、電子情報の多くは画像であったり、動画であったり、音であったり。五感のうちでも非常に情報の多いと言いますか、いろんな意味を持つものをそのまま与えて、あたかも真実を見たかのごとく思わせてしまう。それに反して文字情報というのは、いろいろ想像する余地、組み合わせの余地があって訓練になるわけです。情報の受け手の主体性を保ちながら。時間的余裕もあります。わからなければそこで立ち止まれますし。もちろん電子情報もそうなると思うのですがね。今はとにかくそれを創った人の、これが現実だとか、これが結論だというのがそのまま入ってきて、わかった気になってしまう。

もちろん情報量をたくさん送ることも価値があります。文字より画像のほうが、いろいろな情報が一緒に詰まっていますから。それを文字だけにしたら大変なことになる。直接自分が足を運ばなくても他の世界のことがわかる、人に

直接会わなくてもある人の考え方がわかる、そういった意味でのメディアとして人間の五感というものを限りなく時間的にも空間的にも広げる意味では革新的なものがあります。

しかしそれと同時に学生がその中で主体的にものを考える場を配慮しなければならない。抽象的で、具体的にどういうふう展開したらいいか、行動したらいいかということではないのですが。

電子図書館もそういうふうなシステムが組み立てていけばいいかと思います。機械と対話しながら。しかし、まだそのときも圧倒的な情報をもつ機械のほうから、一方的に情報が流れてくることになるのではないのかと思います。昔、情報化の「光と影」という言葉がありましたが、その影の部分にあたるのかもしれないと思います。そういう電子情報、情報リテラシーといふのかな、それを身につけるためにも図書館でじっくり文字情報、図書で訓練するのもまだまだ重要なひとつだと思います。

もう少し言いますと、そういう訓練を日本の学生は受けていない。無批判に受け入れるのですね。私は、東南アジアへ「青年の船」で行ったことがあります。その時、船上で英語でディスカッションをするのですが、日本の青年は通り一遍の新聞に書いてあることをそのまま発言し、多様な見方で質問があると、それに対して次の展開ができない。語学力ということもあるのだけれど。

- 今の情報連携基盤構築の動きについてどうお考えですか。

**野角** 学生が主体的に情報を集めて何かをする場を提供することは、図書館の役割の一つだと思います。そのためには、理想的には情報メディア教育センターなどと一緒になるべきだと思います。

ただ現時点では、連携基盤センターに図書館が一部参加する形で私はいいと思います。情報を持つものがどこまで一体化するかという問題になりますが。主として集めているものが違ふとか。主たる対象者が違ふとか。そういった意味で、それぞれが、一つの纏まりをもって、どこか基本的な所で繋がる、それが情報連携基盤

の存在だと私は思っています。関連があるからといって全部一緒にしようとすると、それぞれ混沌になってしまう場合もありますからね。現在も連携はしているでしょうけれど、組織の上でもいっそう連携が進むということ、私は感じています。

- それでは、中期的展望とか、長期的展望についてお伺いしたいと思います。中期的展望としては、図書館長の位置付けを、副総長というお話もしていますが。

**野角** いろんな大学で、図書館長というのは学長のひとつのブレンとして位置しています。重要なポストだと思います。執行機関にも加わるということに基本的には賛成ですね。位置付けとしては、総長と直結している。どういうのがいいかわかりませんが。予算の関係もあります。図書館長専任に近い形で副総長を置くという考えもあるでしょう。図書館の位置付けというのは本来、全学の最も重要な基盤の組織ですね。部局というより基盤ですね。

- 長期的展望としてはいかがですか。独立法人化とされていますが、国立、私立、公立大学が同じ土俵で競争するようになったら。

**野角** 私はそうはならないと思います。国が責任をもって支えるべき分野があるわけですから。人材養成にしろ、学問の分野にしろそれを放棄した国は、先進国では今のところないはず。民営的な考え方の流れはあります。ただ民営というのは、収入を自らあげて、自ら生きていくことと考えると、全ての面がそうになってしまうのはおかしい。基礎研究というのはやはり直ちにお金を産み出すことはないけれど、きっちり国が支えていくべきだと思います。国立大学、国がメインのスポンサーの大学は残らねばならない。その中で図書館はどうなのかということです。これからネットワークになったら、書籍というのはどうなるんだろう。有料で貸出してなんていうことに仮にした場合、めったに貸し出されない図書というのはありますよね。しかもそういう本は高いわけです。でもそういうのはちゃんと集積しておかなくてはならない。それは間違いない。名古屋大学はそのような図書館をもつ大学の一つだと私は信じております。

- 少し具体的な話になりますが、図書館の財政基盤の

確保についてアドバイスをお願いします。

**野角** まず図書館がどういう問題を抱え、どういう努力をしているかをPRすることです。現在のように年に何回か現状報告してもらえばいい。何か問題があったときに言うのではなくて。そうすることによって、部局長会などでみんなの意識に上ってくる。財政というひとつの力になるには、そういうことが必要です。現館長も、前館長も、総長や私の処にいろいろ教えてくれますよね、そうすると総長裁量経費とか共通経費というときに頭の隅に出てくる。でも総長がいくら判断しても全学的に納得しない形では動かないから、日頃から種を蒔いておくことが大切です。

- 局長の図書館に対するご理解とかご尽力がどこからの発想なのかお聞きしたいのですが。大学事務局のトップの方では珍しいように思います。

**野角** さきほど話しましたように初中教育で学校図書館を担当してですね。学習というのは主体的にやるべきものだと考えるようになりました。それから青少年対策本部という所にいたのですが、やはり日本人の自立というか、主体性、自主性、そういうことを各種調査を通じ外国の青年と比べて考えていました。

図書館は子供の主体性を育てると同時に、主体性がないと使えないわけです。図書館が情報の集積場所であり、しかもそれを活用する場、活用の訓練をする場である。図書館も教育機能を持っています。小中学校と大学とは違うという人もいるかもしれないけれど。

それからいろんな大学で。まず最初の大学では、単科大学でしたけれど会議に必ず図書館長が出ていました。そこが出発点だったからでしょうか。改革に努力した大学もあったし、活発な先生のいた大学もあった。図書館のいろんな問題で相談に来ていた先生もいた。それだけ図書館と近かったと思います。

- これからの図書館に対して期待すること、あるいはこういうことをしたらどうかということがありましたら教えてください。

**野角** 将来構想、第二次案ですか、ああいうものを着実にやる。ただし、それを進める力を持つために図書館長の位置付けとか、それからPR

と言いましょか。理解を深める努力が必要ですね。中身はそう、具体的には、当然電子図書館化の方もどうぞ進めていただきたいし、将来的には、情報メディアとの関係をもう一度見直す。いつまでも同じ方向を向いてやるというわけではなくて、時々見直す。時代も変わってくるでしょうから。あまりこうあるべきというのではなく、その場その場でどういう姿勢で臨む

べきか。それが柔軟な生き方というか、生き残りもそこにあるのではないかと思います。しかし、本質は常に見るべき。あまり好きな言葉ではないけれど、不易と流行という言葉を使う人がいますが、そういう面もあるかなと思います。それもスタンスの問題ですが。

- 今日はどうもありがとうございました。

2001.7.18 於：本部事務局長室

## 「電子図書館」の前書きと索引について

Frank Bennett

天文学者のクリフォード・ストール氏は、初めての国際ハッカー事件の捜査にかかわった学者で、事件の解決後に出した本「Silicon Snake Oil: Second Thoughts on the Information Highway」(「インターネットはからっぽの洞窟」、倉骨彰訳、草思社)の中で、アメリカ版の「IT革命」について、消極的な態度を示した。当時の1990年代の最前線に立ったパソコン・ユーザ・インターフェースを、どこにでも置いてある鉛筆と比較して、鉛筆の良さを強調した。鉛筆は軽くて、小さくて、簡単に携帯できる。電源がなくても、ちゃんと機能する。紙に限らず、いろんな物に文字でも、画像でも書ける。ちょっとうまくない画像や文字を書いても、再起動する必要がない。ややこしいバージョン・アップ等をしないで済む。別メーカーの鉛筆で書かれた画像でも、簡単に処理できる。どんな言葉の文書でも書ける。落したり、割れたりしてもデータは消えない。それに、使い方がとても分かりやすく、説明書もいらぬ。鉛筆はすごい。今になっても、コンピュータ業界は、鉛筆の交換品となりそうなものを生み出したことがない。

情報をデジタル・データに変えることによって、いろんな面で処理し安くなる。検索が早くなる。保管場所が少なくなる。より多くの人によりやすく提供することは可能になる。保管場所の需要と予算の限定に攻められている現代の

図書館において、図書の電子化が特に魅力を持つことは当然である。だが、情報の「インタフェース」を本から画面に変えたとしても、情報が「有体」環境から開放され、純粋な知識として流通する訳ではない。図書の電子化と言えば、あまり気づかないところまでも研究や教育の支えになってきた図書館の環境を変えることになる。従って、無くすものもある。鉛筆とコンピュータの話ではないが、電子図書館の場合、以前の物を手放して、新しい物に切替えてしまうことが前提となっているので、何よりも、当り前になってきた良き古い図書館の不可欠な機能をなくさないことは大切である。一人のユーザの意見に過ぎないが、その機能をちょっと考えてみた。

日本語を習い始めて3年間経たない内に、UCLA School of Lawの一科目として、日本語の資料を元にした論文に挑戦した。日本語をやっと読めたので、判例や法令を一つ一つ掘り出して読むのが大変だった。一次資料の一部であった法令全書が当時のUCLA School of Lawの図書館に入っておらず、ロス・アンゲレスの郡立法学図書館(LA County Law Library)にお願いして、むこうのアジア法書庫に入って立ち読みすることになった。言葉に困っていたが、必要な情報だけを追求している間に、日本の法律制度のより広い範囲の知識が思ってもいない内に身についた。戦後直後の『法令全書』に遡ると当時の日本の経済状態が紙の質から分った。『法

令全書』より、『六法全書』がよく利用者に参照されていたことも、本の状態からすぐ分った。日本における法律の量と改正の多い時期を自分で評価することができた。画面からアクセスが出来たら便利だったかもしれないが、余分の勉強にはならなかつただろう。現在の私には、電子化の資料の方が本より全然使いやすいと思っているが、名古屋大学における留学生の受け入れの状態を考えると、画面が新たな言葉の壁になるのじゃないか、と疑ってしまう。言葉があまり分からなくても、本の基本的な使い方は世界中共通だが、学生の分からない言葉でボタンやリンクの付いた画面がパッと出ると、ただ「分からない」という印象で最初の研究への試みが終わってしまう恐れがある。

著作権法の分野では、「情報」そのものと、

情報の記録されている紙やらフロッピー・ディスクやらの区別を忘れることによって、誤解が起こりやすい。物は情報を伝えるけれど、情報を物から外して別に考えるとあまり印象が残らない。問題の所在は記録材のあり方ではなく、文脈の存否にある。電子図書館に似たような問題があると私は感じている。図書館は本の保管場所でありながら、自然と深みのある情報環境になっているが、それを確保することにスタッフのかなりの努力が必要になるだろう。いろんな変化の中で大変だろうが、電子図書館への転回をきっかけに、図書館の与えるこの情報環境を広く把握して、特に学生の自発的研究を支持する機関としてのイメージを強化することが望ましいと(自分勝手に)思っている。

(フランク・ベネット 法学研究科教官)

## 図書館見学者について

名古屋大学中央図書館では、本学で行われている大学見学会(名古屋大学へ進学を希望する方々に、名古屋大学の教育研究の特色の紹介や施設見学を行う)に積極的に協力しています。見学会に訪れる東海地区の高校生や保護者等の方に名古屋大学をよく理解してもらうために、大学見学会や大学説明会で図書館見学の受入れを行っています。名古屋大学の教育研究の特色の理解につながることを期待しています。なお、現在までの大学見学会の高校別訪問者数を表1に示します。

表1 . 平成13年度の高校別訪問者数

訪問日	学校名	人数
4/27	岐阜北高等学校	261名
5/8	山梨学院大学附属高等学校	104名
5/11	浜松湖南高等学校	45名
5/15	中京高等学校	130名
5/16	美濃加茂高等学校	70名
6/12	安城南高等学校	3名
6/22	静岡西高等学校	150名

## 開館時間変更のお知らせ

中央図書館では平日(8月は除く)の開館時間を8:45 - 22:00に変更し9月より試行します。これに伴い、図書の貸出取扱時間を8:45 - 21:00に、研究個室、グループ研究室等の施設の利用時間を9:00 - 21:00にそれぞれ延長します。

### 変更後の開館時間

平日(8月を除く) 8:45 - 22:00 (図書の貸出: 8:45 - 21:00)  
 平日(8月) 8:45 - 17:00 (図書の貸出: 8:45 - 16:30)  
 休日 8:45 - 17:00 (図書の貸出はおこないません)

中央図書館

## 平成12年度 中央図書館利用状況

項 目	平成11年度	平成12年度	備 考
サービス対象者数	19,779人	20,063人	学生10,902人；院生5,697人；教官1,843人；職員1,621人
閲覧サービス			
1. 年間開館日数	327日	328日	(うち土・日・祝日開館 103日)
2. 年間入館者数	630,535人	644,230人	
3. 館外貸出冊数	107,023冊	109,519冊	1日平均 487冊
参考調査サービス			
1. 調査依頼者数	2,983人	2,980人	学内者 2,290人, 学外者690人, 延取扱件数: 4,555件
2. 他機関への調査依頼	58件	6件	
3. 情報検索利用件数	88件	54件	JOIS 36件; STN 3件; 日経テレコン4件; NACSIS-IR 11件
4. CD-ROM利用件数(ネットワーク)	66,829件	59,433件	MEDLINE 42,342件; BA 10,706件; ERIC 673件; PsycLit 4,150件; NTIS 473件; EBMR 1,089件
5. CD-ROM利用件数(スタンドアロン)	1,320件	1,184件	雑誌記事索引(専用端末分) 396件; SCI 331件; PDF 270件; CD-HIASK 61件; JCR 34件; その他 92件
6. オンライン検索		48,631件	NICHIGAI/WEB(雑誌記事索引)(H12導入)
7. 電子ジャーナル利用件数		81,527件	EBSCOhost 24,436件(11ヶ月); First Search ECO 14,501件(12ヶ月); SD-21 42,590件(7ヶ月)
8. OPACアクセス件数	(123,707件)*	756,454件	学内件数 691,552件; 学外件数 64,902件 *3ヶ月(第4四半期)
9. 図書館ホームページアクセス件数		2,504,472件	学内件数 967,667件; 学外件数 1,536,805件
相互利用サービス(他機関)			
1. 図書貸出	1,211冊	1,247冊	
2. 図書借受	359冊	75冊	
3. 文献複写受付件数	11,880件	12,405件	
4. 文献複写依頼件数	947件	618件	
5. 他機関の利用申請	905人	610人	(国立大学共通閲覧証発行(H.12.7廃止): 123人; 紹介状発行: 487人)
館内資料の文献複写利用			
1. 文献複写枚数(館内備付け複写機利用)	1,066,777枚	996,133枚	
2. コピーデリバリー・サービス	1,027件	1,684件	
3. コンテンツシート・サービス	5,938枚	4,689枚	
館内施設利用			
1. 研究個室	1,763件	1,922件	延利用人数 4,389人
2. 演習室	14件	23件	延利用人数 647人
3. グループ研究室	404件	545件	延利用人数 2,838人
4. 共同研究室	642件	584件	延利用人数 1,387人
5. 視聴覚室	584人	564人	

## 平成12年度 附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数

区 分	蔵書冊数（平成13年3月31日現在）			平成12年度図書受入数			平成12年度雑誌受入種類数		
	和 書	洋 書	合 計	和 書	洋 書	合 計	和 雑 誌	洋 雑 誌	合 計
中 央 図 書 館	572,202	406,726	978,928	10,279	4,026	14,305	3,550	1,001	4,551
医 学 部 分 館	63,231	104,844	168,075	1,510	2,168	3,678	626	897	1,523
文 学 部 ・ 文 学 研 究 科	135,502	92,888	228,390	3,647	3,400	7,047	975	443	1,418
教育学部・教育発達科学研究科（含 附属学校）	68,334	38,313	106,652	807	526	1,333	422	329	751
法 学 部 ・ 法 学 研 究 科	110,007	80,506	190,513	2,399	2,245	4,644	569	61	630
経済学部・経済学研究科（含 附属国際経済動態研究センター）	126,514	116,943	243,457	2,642	1,926	4,568	846	443	1,289
情報文化学部（含 人間情報学研究科・国際言語文化研究科・言語文化部）	102,927	88,230	191,157	3,841	2,204	6,045	575	357	932
理 学 部 ・ 理 学 研 究 科	19,175	69,952	89,127	644	1,564	2,208	302	634	936
工学部・工学研究科（含 先端技術共同研究センター）	78,362	115,891	194,253	1,143	1,609	2,752	848	583	1,431
農 学 部 ・ 生 命 農 学 研 究 科	61,255	57,947	119,202	814	1,365	2,179	959	445	1,404
大学院国際開発研究科	11,402	13,949	25,351	1,524	1,695	3,219	127	219	346
大学院多元数理科学研究科	9,567	78,841	88,408	252	1,318	1,570	72	503	575
環 境 医 学 研 究 所	1,898	6,722	8,620	4	72	76	240	56	296
太 陽 地 球 環 境 研 究 所	3,541	8,728	12,269	29	326	355	12	42	54
大 気 水 圏 科 学 研 究 所	3,368	11,294	14,662	112	385	497	179	156	335
アイソトープ総合センター	176	106	282	0	0	0	6	3	9
化学測定機器センター	20	348	368	0	3	3	0	3	3
情報メディア教育センター	458	527	985	25	36	61	13	6	19
高温エネルギー変換研究センター	52	19	71	2	0	2	1	1	2
遺 伝 子 実 験 施 設	19	29	48	0	0	0	0	0	0
年代測定資料研究センター	86	14	100	0		0	1	3	4
生物分子応答研究センター	27	79	106	1	2	3	3	1	4
留 学 生 セ ン タ ー	2,400	1,020	3,420	37	81	118	0	1	1
理工科学総合研究センター	90	186	276	6	3	9	2	3	5
農学国際教育協力センター	14	8	22	5	6	11	0	0	0
大型計算機センター	1,763	2,918	4,681	19	20	39	34	24	58
総合保健体育科学センター	7,833	4,599	12,432	184	128	312	33	33	66
医療技術短期大学部	28,039	4,904	32,943	1,079	350	1,429	313	75	388
合 計	1,408,262	1,306,536	2,714,798	31,005	25,458	56,463	10,708	6,322	17,030

〔国内図書館関係日誌〕

- ・東海地区国立大学図書館協議会総会（於：愛知教育大学）<4.20> 出席者：伊藤館長、吉田事務部長、藤森情報管理課長、小花情報システム課長、加藤情報管理課長補佐
- ・電子ジャーナルタスクフォース（於：東京大学）<4.27> 出席者：伊藤館長、小花情報システム課長
- ・国立大学附属図書館事務部課長会議（於：東京医科歯科大学）<5.29> 出席者：吉田事務部長、藤森情報管理課長、玉木情報サービス課長
- ・国立大学図書館協議会同賞受賞者選考委員会（平成12年度第3回）、著作権特別委員会（平成12年度第2回）、常務理事会（平成12年度第2回）（於：東京大学）<5.30>  
理事会（平成12年度第4回）（於：東京大学）<5.31>  
出席者：伊藤館長、吉田事務部長、藤森情報管理課長、玉木情報サービス課長
- ・電子ジャーナルタスクフォース（於：東京大学）<5.31> 出席者：伊藤館長、小花情報システム課長
- ・平成13年度国立大学図書館協議会と国立情報学研究所との業務連絡会（於：東京大学）<6.1>  
出席者：吉田事務部長、小花情報システム課長
- ・愛知図書館協会総会（於：愛知県図書館）<6.1> 出席者：藤森情報管理課長
- ・第48回国立大学図書館協議会総会（於：北海道大学）<6.27～28> 出席者：伊藤館長、吉田事務部長、藤森情報管理課長、小花情報システム課長
- ・東海地区大学図書館協議会機関誌編集委員会・運営委員会（於：名古屋大学）<7.5>

〔学内動向〕 <13.4.6～13.7.5>

- 会議
- ・第13-1回附属図書館商議員会<4.24>
    - ・地球水循環研究センターの商議員会へのオブザーバー出席について
    - ・商議員会内各委員会への委員の配属及び委員長、副委員長の選出について
    - ・附属図書館中央図書館コーナー小委員会委員について
    - ・自己評価実施委員会委員の選出について
    - ・附属図書館研究開発室教官選考準備委員会の設置について
    - ・概算要求について
    - ・年間の開催予定について
  - ・第13-1回学術情報事務会議<4.25>
  - ・第13-1回電子図書館推進委員会<5.24>
  - ・第13-1回蔵書整備委員会<5.24>
  - ・第13-2回学術情報事務会議<6.5>
  - ・第13-1回図書館システム検討委員会<6.6>
  - ・東海地区国立大学図書館長懇談会<6.15>
  - ・第13-2回附属図書館商議員会<6.21>
    - ・外国文学セクション小委員会の設置について
    - ・附属図書館研究開発室の教官人事について
    - ・大学運営組織の中の附属図書館の位置付けについて
    - ・名古屋大学国際フォーラムについて  
研修・講習会等への参加
  - ・第2回EDCセミナー（於：西南学院大学）<5.24-25> 参加者：河合成典（経済）
  - ・「初めての電子ジャーナル」説明会（於：名古屋大学）<6.12～13> 出席者：76名  
部局動向
  - ・大学院国際開発研究科情報資料室 - - 昼休み開室の試行実施（4.13から）
  - ・医学部分館 - - 改修工事のための休館（6.25-9.24）、臨時窓口の開設（7.5-9.18）